

## 対人関係の親密化に伴う自己開示と 類似・異質性認知の変化

下斗米 淳

人は、日々対人関係を営む過程において、様々な解決すべき課題に遭遇していることと思われる。この課題の遭遇に際して、関係を営む者の間には、その課題解決に利する資源を相対的に多く有する者がそれを提供するといった相互の行動期待のあることが示唆されており(下斗米・佐藤, 1988), その行動期待の遂行が互いの親密感のある程度保証していることも明らかにされている(下斗米・清水・山岡, 1989)。

ところで、こうした行動期待が形成されるには、対人間の相対的な類似・異質性の認知が必要であろう。なぜなら行動期待とは、課題解決に利する資源の優劣について、関係の当事者間に共有されている自己・他者像に基づいて形成されるものと考えられるからである。更に、類似・異質性認知の材料を提供するという意味において、当事者間には自己開示 (Self-disclosure) の交換が重要であると考えられる (cf, Altman & Taylor, 1973)。

しかしながら、この自己開示の様相は、対人関係における親密さの段階(例えば、顔見知り、友達、親友)に応じて異なると指摘されている (e. g., Morton, 1978)。Won-Doornink (1978) は、対人関係を当事者が覚える親密感の程度から初期・中期・後期の3段階に分け、各段階の関係内で交換される自己開示の内面性 (intimacy) を比較している。その結果、内

対人関係の親密化に伴う自己開示と類似・異質性認知の変化（下斗米）

面性の低い情報の開示頻度は初期で最も高く、中期、後期と親密感の強い関係段階になるほど減少するが、一方内面性の高い情報については、初期・後期に比べ中期で最も開示量が多くなることを明らかにしている。この知見は、内面性の低い情報の開示頻度が親密感と負の相関関係にあるのに対して、内面性の高い情報においては中期でその開示が最頻度をとるといふ曲線関係を指摘した Altman & Taylor (1973) の理論的仮説を実証しているばかりではなく、関係の親密さに応じて開示されるに最適な内面性をもつ情報が規定されていることを推測させよう (cf, Derlega & Grzelak, 1979)。

また下斗米 (1986) は、対人関係を助長的相互依存関係と妨害的相互依存関係とに大別し、課題が関係に付与された際の自己開示の様相を比較検討している。その結果、妨害的相互依存関係では、当事者の戦略的な (strategic) 動機づけのもとに自尊感情レベル (self-esteem) の高低で自己の劣等性を顕在化させる開示者と自己の優越性を強調する開示者とに分極化するのに対して、助長的相互依存関係下においては、課題解決に係わる資源に関する自己の情報について、優劣 (長所・短所) いずれであっても積極的に自己開示が図られることを見い出している。更に Tuckman (1965) は、心理治療集団を観察し、対人関係の進展と共に、当事者は課題解決を目指すための社会的統一体として相互に関与し合うことを学習し機能的な役割行動を発現するようになることを明らかにしている。これら下斗米 (1986) 及び Tuckman (1965) の知見を考え合わせると、対人関係において相互の関与が深まるにつれて機能的な役割分担が明確化してくるが、それは同時にその役割行動期待の基礎となっている類似・異質性の認知を行うべく、自己開示もまたより促進されてくることを想定させるものであると言えよう。

このように、対人関係が親密なものとなるに従い、自己開示され合う情報の種類や開示量に変化の生じることが予想される。では、こうした自己開示により形成される類似・異質性認知についてはどうであろうか。

従来から、対人関係における当事者相互の類似性認知を検討した研究は数多く見受けられるが、親密な者同士の間には態度・意見について互いに類似していると認知する傾向がこれまで一貫して認められている（cf, Byrne, 1969）。しかし、現実に態度や意見の類似性認知が親密感の醸成に効果を及ぼすのは、当事者間で相互作用がかなり進んだ段階であるとの指摘がある（Newcomb, 1961）。この理由としては、態度や意見のような一般的には内面性の高い情報を会って間もない時期に得られることは日常生活において稀であることが挙げられよう。加えて Argyle (1967) も述べる通り、態度・意見のような物理的妥当性（physical reality）の低い特性については、社会的妥当性（social reality）の支持を与え合うことで相互作用の増大が図られ、結果としてより類似したものとなる過程が考えられる。これらの理由からみると、態度・意見に関する類似性認知については、関係の初期よりも親密さの深まった段階において認められるのではなかろうか。但し、Heider (1959) のバランス理論から導出される通り、親密な相手、自己、そして態度対象の3要素の認知的均衡を作り出す必要から態度・意見の類似性を現実以上に高く認知するという、仮定された類似性（assumed similarity）現象も想定できる。この両者の見極めは難しいが、いずれにしろ対人関係においては、少なくとも態度・意見の類似性認知が各段階通して認められるものと考えられる。

これに対して、対人関係に付与される課題の解決には、役割分担の上から異質性認知の重視されることは先述の通り考え得る。従って、関係の親密さの深まりと共に、その時々で付与される課題の解決への特定な行動期

対人関係の親密化に伴う自己開示と類似・異質性認知の変化（下斗米）

待が明確化していくとすれば、少なくとも当該の課題に関連の強い特性について、その異質性を顕在化せざるを得なくなることが予想できよう。この限りにおいては、仮定された類似性現象の存在を勘案しても、関係がかなり親密になれば異質であると認知される特性もまた見い出されてくるのではなかろうか。

以上のように、本研究では、対人関係を営む者同士の間における自己開示及び類似・異質性認知の様相を観察する。そして、相手に対する親密感の程度から対人関係の段階分けを行い、その関係段階の間で人のいかなる側面にどのような自己開示及び類似・異質性認知の差異が認められ得るのか、探索することが目的である。

## 方 法

### 調査対象者

私立大学生男女 125 名（男 64 名・女 61 名、年齢範囲 18～25 歳）。

### 調査内容

本研究は質問紙調査によった。フェースシートにおいて、回答者の年齢・性別等基本属性を問うた後、以下の質問に回答を求めた。

- ① 知人の想定 「入学以来知り合った人の中から相対的にみて、一緒に居合わせることが多いと言える同性の人を 1 人思い浮かべて下さい。」との教示のもと想定を求め、その人物のイニシャル・年齢・性別を回答してもらった。
- ② 想定人物との交際期間 想定した人物と初めて出会ってから現在までの交際期間について回答を求めた。
- ③ 自己開示度 Jourard & Lasakow (1958) の JSDQ (Jourard's Self-

Disclosure Questionnaire) を参考に、態度・意見、趣味・嗜好、恋愛、能力、学業、人格、友人関係、家族・家庭生活、身体・容姿、進路の10領域にわたる事柄36項目を設定し(表1参照)、各項目について、最近1・2ヶ月の間での開示程度を「極めて詳しく話した」(+4)から「全く話さなかった」(-4)までの両極9件法尺度で評定を求めた。

- ④ 類似・異質性認知 ③と同一の36項目について、自分と相手とはどの程度類似あるいは異質であると思うのかについて、「極めて似ている」(+4)から「極めて似ていない」(-4)までの両極9件法尺度に評定を求めた。
- ⑤ 被開示度 ③と同一の36項目について、最近1・2カ月の間に相手ほどの程度自分に対して開示したのか、「極めて詳しく話した」(+4)から「全く話さなかった」(-4)までの両極9件法尺度で評定を求めた。(本研究の目的に照らし、結果報告は割愛)。
- ⑥ 親密感評定 どの程度親密な間柄であると言えるのかについて、「極めて親しい」(+4)から「極めて親しくない」(-4)までの両極9件法尺度に評定を求めた。

質問紙は、講義室において授業中集団施行された。回答時間に制限は設けられていなかったが、所要時間は概ね15~30分であった。

## 結 果

### 対人関係の段階分け

想定した人物に対する親密感評定値に基づいて、-2点以下の者を関係初期段階、-1から+1までを関係中期段階、+2以上を関係後期段階にある者と操作的に定義づけた。その結果、初期段階群に41名、中期段階群

対人関係の親密化に伴う自己開示と類似・異質性認知の変化（下斗米）

表 1 自己開示・類似性認知に関する下位尺度別主成分分析結果

尺度項目	自己開示尺度 主成分負荷量	類似性認知尺度 主成分負荷量
<b>態度・意見</b>		
道徳・社会規範に対する態度……………	.636	.766
社会について不満に思うこと……………	.792	.829
結婚観……………	.559	.759
金銭観……………	.594	.718
寄与率	42.428%	59.087%
<b>趣味・嗜好</b>		
音楽の好み……………	.574	.728
余暇の過ごし方……………	.805	.732
食べ物の好み……………	.636	.793
趣味としている事柄……………	.753	.750
寄与率	48.724%	56.451%
<b>恋愛</b>		
これまでの恋愛経験とその深さ……………	.639	.885
性交渉についての経験と所感……………	.789	.802
異性への好み……………	.796	.910
恋人を選ぶ上に重視する事柄……………	.730	.925
寄与率	54.929%	77.776%
<b>能力</b>		
会話力に関する自己評価……………	.755	.840
運動技能の優劣……………	.551	.801
思考力についての自己評価……………	.812	.818
特技・資格……………	.634	.727
寄与率	48.355%	63.606%
<b>学業</b>		
学校の成績……………	.660	.812
学校に対する不満……………	.604	.669
学業に対する打ち込み方……………	.850	.722
好きな授業科目・嫌いな授業科目……………	.755	.784
寄与率	52.303%	56.066%

表 1（つづき）

尺度項目	自己開示尺度 主成分負荷量	類似性認知尺度 主成分負荷量
<b>人 格</b>		
長所・短所と思う自分の性格……………	.760	.842
罪や恥に思うような出来事……………	.652	.808
直したいと考えている性格側面……………	.818	.896
誇らしく思える自分の性格側面……………	.743	.886
寄与率	55.613%	73.745%
<b>友人関係</b>		
自分にとって理想と考える友人像……………	.802	.862
友人関係で困ったこと・悩み……………	.710	.847
友人との日頃の付き合い方……………	.824	.915
友人として相性のよい人・悪い人……………	.701	.859
寄与率	57.943%	75.869%
<b>家族・家庭生活</b>		
親兄弟姉妹と自分との関係……………	.698	.855
家族・家庭生活について誇りや恥と思う 事柄……………	.828	.921
家族の中での自分の役割……………	.822	.877
寄与率	61.554%	78.287%
<b>身体・容姿</b>		
健康・美容に対する取り組み方……………	.868	.915
容貌や身体について満足しているところ や不満に思うところ……………	.868	.915
寄与率	75.393%	83.665%
<b>進 路</b>		
就職希望業種……………	.783	.906
将来に対して抱いている不安……………	.710	.897
大学卒業後の進路に関する計画……………	.760	.925
寄与率	40.744%	82.715%

対人関係の親密化に伴う自己開示と類似・異質性認知の変化（下斗米）

には41名，そして後期段階群に43名が各々振り分けられた。

### 自己開示度及び類似・異質性評定項目の下位尺度化

自己開示度及び類似・異質性認知を測定する評定尺度36項目は，予め10領域のいずれかに対応するよう収集されたものであった。そこで，この両尺度別に，各領域毎に該当する項目の評定値について主成分分析を行い，同一領域における特性を測定する下位尺度としての妥当性を検討した。

主成分分析の結果は，表1に示す通りである。表1から明らかなように，各領域共に項目の主成分負荷量は低くとも.60前後とかなり高くなっており，第1主成分の寄与率も評定値の全変動を説明するには良好な値を示していると考えられる。そこでこの結果から，各領域に対応する項目群はそれぞれ単因子構造を有する尺度であると判断し，以下の分析においては，同一領域における項目群の評定値合計点をもって下位尺度得点とし用いることとした。

### 関係段階間の自己開示及び類似・異質性認知差異

関係段階間における差異特性の抽出 まず，関係段階間で，いかなる特性において自己開示及び類似・異質性認知に差異が認められ得るかを検討するため，関係3段階を外的基準，自己開示及び類似・異質性認知における各下位尺度得点を説明変数とする正準判別分析を試みた。

分析の結果，有意な正準相関係数を示す軸として，第1判別関数 ( $\rho = .619$ ;  $\chi^2 = 82.603$ ,  $df = 49$ ,  $p < .001$ ) と第2判別関数 ( $\rho = .471$ ;  $\chi^2 = 28.237$ ,  $df = 19$ ,  $p = .078$ ) が得られた。そこでこの2軸を基に判別率を算出したところ67%と比較的高目であったことから，本分析からは一応吟味するに値する結果が得られていると言えよう。表2には，第1・第2判別関数における各説明変数の標準化正準判別係数を示す。

そこで，関係3段階の判別に寄与する特性を抽出するべく，第1・第2



表 2 関係段階を外的基準とする正準判別分析結果

説明変数	標準化正準判別係数	
	第 1 判別関数	第 2 判別関数
態度・意見開示度	-.421④	.441③
趣味・嗜好開示度	-.174	.067
恋愛開示度	-.568②	-.676①
能力開示度	.477③	.610②
学業開示度	-.159	.151
人格開示度	-.284⑧	.369⑦
友人関係開示度	.365⑤	.125
家族・家庭生活開示度	.225⑨	-.051
身体・容姿開示度	-.120	-.344⑧
進路開示度	-.191⑩	.136
態度・意見類似性	-.348⑥	-.292⑨
趣味・嗜好類似性	.176	.383⑥
恋愛類似性	-.137	-.027
能力類似性	-.122	.106
学業類似性	.341⑦	-.102
人格類似性	.110	.233
友人関係類似性	-.671①	-.246⑩
家族・家庭生活類似性	-.000	-.395④
身体・容姿類似性	.120	-.391⑤
進路類似性	-.083	-.094
正準相関係数	.619	.471

\* 表中の丸数字は標準化正準判別係数の上位 10 番までの順位を表す。

判別関数双方の標準化正準判別係数の絶対値が相対的に高い説明変数を見てもみると、自己開示度においては態度・意見、恋愛、能力、人格、友人関係、そして身体・容姿が、また類似性認知では態度・意見、趣味・嗜好、学業、友人関係、身体・容姿を挙げることができる。この結果は即ち、これらの変数がいずれも、関係 3 段階間で評定値に顕著な差異の認め得る特性領域であることを示すものである。

対人関係の親密化に伴う自己開示と類似・異質性認知の変化（下斗米）

表 3 4 クラスター間の特性プロフィール

特 性	調査対象者クラスター（N=125）				F (3,124) 値
	類似性認知 開示少	異質性認知 開示少	類似性認知 開示多	異質性認知 開示多	
デモグラフィック					
構成人数	31	27	45	22	—
男女構成(男:女%)	48:52	63:37	44:56	54:46	—
平均年齢	18.968	19.556	19.133	19.909	—
親密度	.258	.815	1.889	2.227	6.857
自己開示					
態度・意見	4.968	4.852	10.067	12.636	24.175
恋愛	3.290	7.111	13.267	17.864	44.002
能力	6.742	5.370	11.933	13.909	23.096
人格	4.129	4.519	11.400	14.909	36.851
友人関係	5.613	4.926	11.067	14.773	21.834
身体・容姿	2.129	2.444	5.600	5.591	14.584
類似・異質性認知					
態度・意見	-.968	-2.481	.800	-.864	9.913
趣味・嗜好	1.161	-3.259	1.222	-1.682	12.589
学業	1.452	-2.556	1.622	-.682	7.105
友人関係	2.355	-1.519	2.444	.909	7.633
身体・容姿	-.097	-1.926	.000	-1.409	6.186

\* 自己開示度における数値は大きいほど自己開示頻度の多いことを示す。

\*\* 類似・異質性認知における数値は大きいほど自他が類似していると認知されていることを示す。

\*\*\* F 値 (df=3,124) はいずれも  $p < .001$  で有意な主効果が認められている。

自己開示及び類似・異質性認知における調査対象者の類型化 関係段階間で顕著な差異の認め得る特性が抽出されたので、次に、この 11 特性に基づき調査対象者の類型化を図る。まず、11 特性の標準化正準判別係数に対して因子分析（主因子解，バリマックス回転）を施した。因子抽出の打ち切り基

準として固有値 1.0 以上を採用した結果、自己開示度を表す軸と類似・異質性認知を反映する軸の 2 因子が抽出できた（累積寄与率 47%）。そこで、この 2 軸に対する調査対象者の因子得点を基にウォード法によるクラスター分析を行ったところ、クラスターは 4 つに大きく分離し解釈妥当な 4 クラスターが析出された。表 3 には、4 クラスターの各特性プロフィールとして、構成人数、男女構成比、平均年齢、及び各特性の平均評定値がまとめてある。また、各特性評定値についてクラスター 4 水準とする 1 元配置分散分析を行った結果も合わせて示す。

表 3 より各クラスターの解釈を試みると、第 1 クラスターは類似性認知が高いものの自己開示は少ない調査対象者群であることがわかるので、“類似性認知・開示少頻度”型と命名した。また第 2 クラスターは、類似性認知が低く自己開示も少ない調査対象者群なので“異質性認知・開示少頻度”型と、第 3 クラスターは類似性認知が高く自己開示も多い調査対象者群となっているので“類似性認知・開示多頻度”型、そして第 4 クラスターについては、類似性認知は低く自己開示の多い調査対象者群であるので“異質性認知・開示多頻度”型と呼ぶこととしたい。以上のように、対人関係段階を通して、自己開示及び類似・異質性認知の様相から調査対象者を類型化した結果、4 類型の存在が認められたと言える。

**関係 3 段階における類型別内訳** 対人関係の親密度増加に伴い、自己開示及び類似・異質性認知の変化を明らかにするために、関係初期・中期・後期の各段階において、自己開示及び類似・異質性認知の特性類型別内訳を比較検討した。表 4 には、関係 3 段階と 4 類型のクロス集計結果を示す。集計結果について  $\chi^2$  検定したところ  $\chi^2$  値 26.02 が得られ、2 変数間に有意な交互作用効果が認められた ( $df=6$ ,  $p<.001$ )。

表 4 をみてみると、まず関係初期段階においては、“類似性認知・開示

対人関係の親密化に伴う自己開示と類似・異質性認知の変化（下斗米）

表 4 関係段階における 4 クラスター別内訳

関係段階	調査対象者クラスター				合 計
	類似性認知 開示少	異質性認知 開示少	類似性認知 開示多	異質性認知 開示多	
初期段階	19(46.3%)	12(29.3%)	7(17.1%)	3( 7.3%)	41(100.0%)
中期段階	6(14.6%)	5(12.2%)	22(53.7%)	8(19.5%)	41(100.0%)
後期段階	6(14.0%)	10(23.3%)	16(37.2%)	11(25.6%)	43(100.0%)
合計	31(24.8%)	27(21.6%)	45(36.0%)	22(17.6%)	125(100.0%)

少頻度”型が5割近くを占め最も多く、次いで“異質性認知・開示少頻度”型も3割弱で続いており、類似・異質性認知の違いはあるものの自己開示をあまり多く行なわない者で圧倒的多数が占められていることがわかる。

関係も中期段階に入ると、“類似性認知・開示多頻度”型が過半数を占め集中する傾向を読み取ることができ、自己開示の交換はあまりなされないながらも相互を類似していると認知するようになることが窺える。

これに対して関係後期段階になると、“類似性認知・開示多頻度”型が最多であるものの、“異質性認知・開示少頻度”型と“異質性認知・開示多頻度”型がそれぞれ3割近くと僅差で続いており、中期段階とは逆に分散傾向を示すようになっている。しかしながら、“異質性認知・開示少頻度”型と“異質性認知・開示多頻度”型を合わせると、自他間の異質性を認知する者で5割近くが占められるようになることがわかる。

このように、正準判別分析において関係段階間に差異が大きいと考えられた特性領域に関する本分析からは、対人関係における親密感が増加するにつれ、自己開示は頻繁に交換されるようになる。そしてまた、関係初期から中期にかけて類似性の認知は強まるようになるものの、関係も後期に入ると、類似性認知型の者と共に、自他は異質であると認知する者も半数近く見受けられるようになるという結果が得られた。

## 考 察

本研究の目的は、他者に対する親密感の程度から対人関係の段階分けを行い、その関係段階の間で、人のいかなる側面にどのような自己開示及び類似・異質性認知の差異が認められるのかを探索することであった。

得られた結果の1つ目は、関係段階において、自己開示度では態度・意見、恋愛、能力、人格、友人関係、そして身体・容姿という特性領域について、また類似・異質性認知では態度・意見、趣味・嗜好、学業、友人関係、身体・容姿に関する差異が顕著であるということであった。

このうちまず、自己開示及び類似・異質性認知双方において関係段階間に差異の大きい特性領域としては、態度・意見、友人関係、身体・容姿を挙げることができる。この結果は即ち、ある特定の関係段階に至ると自己開示の増減が顕著に認められ、かつ類似ないし異質であると自他を認知するようになることを意味している。

これに対して学業と趣味・嗜好は、類似・異質性認知においてのみ変化の大きい特性領域であることが示された。これらは、例えば学業ならば成績表や試験、趣味・嗜好なら一緒に出かける場合やサークル・同好会などにより、自己開示するまでもなく自他の類似・異質性が顕在化され易い特性領域であると考えられる。この意味では、自己開示度に関係段階で差異が小さかったこともある程度理解できよう。むしろ、調査対象者である学生において特に課題性の強い学業や趣味・嗜好に関する類似・異質性認知が、やはり問題の部分で論じたように、関係段階において変化するようになることが示された点は興味深い。一方、恋愛、能力、人格は、自己開示度でのみ差異の顕著な特性領域であると位置づけられた。これらはいずれ

対人関係の親密化に伴う自己開示と類似・異質性認知の変化（下斗米）

もまさに個人の内的特性であるので、学業や趣味・嗜好とは逆に、相手の特性認知に際しその情報収集は自己開示の交換に依存することになる故の結果であると解釈できよう。

次に、上記特性領域において、調査対象者が“類似性認知・開示多頻度”型，“類似性認知・開示少頻度”型，“異質性認知・開示少頻度”型，“異質性認知・開示多頻度”型の4類型に大別されたという点について触れたい。本研究の目的の1つは、対人関係を営む者同士の間にかなる自己開示と類似・異質性認知の様相があるのか観察することにあつたが、上述の結果は、自己開示と類似・異質性認知が必ずしも一義的な関係にあるわけではないことを示唆している。つまり、自己開示が増大するほど異質性認知がなされるとか、類似性認知が高まるにつれて自己開示が多くなるといった単純な因果関係では説明されないということである。むしろこのことは、関係を営むペアについて、この4類型のいずれに属させるかを規定する要因が存在していることを想定させるものである。渡辺（1990）はこの点に関して個人差を考慮すべきであると主張しているが、状況的変数も含め更なる検討を要しよう。

しかし、本研究において最も重要な目的とは、他者に対する親密感の程度から対人関係の段階分けを行い、その関係段階の間での自己開示及び類似・異質性認知の差異を探索することであつた。そこで、親密感に基づく関係段階において自己開示及び類似・異質性認知の様相を検討したところ、対人関係における親密感の増加に伴い、上記の11特性領域について、自己開示は頻繁に交換されるようになり、また、自他間の異質性認知が強まるという傾向を見出した。

この結果は、当初問題部分で論じた仮説と一貫している。即ち、相互の関与が深まるにつれて、当該関係内において機能的な役割行動が明確化し

てくることに伴い、役割行動期待の基礎となる異質性認知が重要視され、それ故に類似・異質性認知を行うべく自己開示もまたより促進されてくるという一連の図式を支持していると言えるのではなからうか。

但し、上記の図式は、必ずしも類似性認知の対人関係に及ぼす影響が関係も後期になると異質性に比べて小さくなるということの意味しない、という点に留意する必要がある。下斗米・佐藤（1988）は、大学生の友人関係内においては異質性認知の基づく資源の提供と共に、互いの類似性を確認し得る行動も期待されていることを確認している。更に、下斗米ら（1989）は、類似性認知が対人関係を進展させるように機能していることを明らかにしている。これらの知見は、役割行動期待を形成する上で必要な異質性認知とは別に、相手に対する情緒的機能を保証するために類似性認知が重要な意味を有しているものであると位置づけられるのかも知れない。この点については、対人魅力に対する類似性認知の効果を扱った従来からの膨大な研究（cf, Brim & Hoff, 1957; Byrne, 1969; Cohen, Stotland, & Wolf, 1955; Lott & Lott, 1960）によっても推測されるところであろう。

最後に、本結果を踏まえ今後の研究における方向付けについて若干触れておきたい。本研究では、役割行動期待の形成に際しその基礎となっている自己開示及び類似・異質性認知の様相と関係段階間における差異を吟味した。しかし、各関係段階内で相互に期待されている役割行動が、付与された課題の解決に効力をもたない事態についても注目することは重要であると思われる。何故ならば、この事態とは、役割行動期待の再構築が求められるわけであり、その基礎となっている自他間の類似・異質性についても認知し直さねばならない事態であると言えるからである。換言すれば、これまで当事者間に共有されてきた自己・他者像について作り変えることを余儀なくされる事態であるということになる。ところが、この自己ない

対人関係の親密化に伴う自己開示と類似・異質性認知の変化（下斗米）

し他者像の作り変えられる心理的過程もまた、結果として後の関係構造そのものを方向付けるという意味で、合わせて考察すべき問題であると言えるのではなかろうか。この過程は、Swann ら (e. g., Swann, 1983) によれば自己確認過程 (self-verification process) と呼ばれ、近年影響要因を検出する等幾つかの検討が試みられているところである (e. g., Swann & Read, 1981; 下斗米, 1988, 1990)。

このように考えてくると、対人関係の進展メカニズムには、上記の図式で想定されたように自己開示及び類似・異質性認知を基礎とする役割行動期待の遂行が関係の進展に効果を及ぼす過程と、逆に役割行動の遂行結果が自己開示及び類似・異質性認知に影響を与える過程が想定され、しかもそれらが相互規定的に関連している可能性も考えられよう。今後、こうした枠組みに注目し、対人関係の進展メカニズムを詳細に考察していく必要があると思われる。

## 要 約

本研究では、対人関係を営む者同士の間における自己開示及び類似・異質性認知の様相を観察した。そして、相手に対する親密感の程度から対人関係の段階分けを行い、その関係段階の間で人のいかなる側面にどのような自己開示及び類似・異質性認知の差異が認められ得るのか、探索することが目的であった。

得られた結果を要約すると次の3点になる。

1. 対人関係において親密度が深まるに従い、類似・異質性認知では態度・意見、趣味・嗜好、学業、友人関係、身体・容姿という特性領域について、また自己開示度においては態度・意見、恋愛、能力、人格、



友人関係、そして身体・容姿について変化の顕著であることが明確となった。

2. 対人関係を営む者については、上記特性領域において“類似性認知・開示多頻度”型、“類似性認知・開示少頻度”型、“異質性認知・開示少頻度”型、“異質性認知・開示多頻度”型の4類型に大別される。
3. 対人関係における親密感の増加に伴い、上記特性領域について、自己開示は頻繁に交換されるようになり、また、自他間の異質性認知が強まるという傾向を見出した。

以上の主たる結果を考察すると、まず対人関係を営む者の間で相互に接近し親密感が増大するにつれて、当該関係内に機能的な役割行動が明確化し、その役割行動期待の基礎として異質性認知が重要視されるようになると言える。そして、こうした類似・異質性認知を行うための情報収集の手段として、自己開示もまた関係内で促進されることとなる、という一連の図式が導出された。

#### 引用文献

- Altman, I. & Taylor, D. A. 1973 *Social penetration*. Holt, Rinehart, and Winston.
- Argyle, M. 1967 *The psychology of interpersonal behavior*. Harmondsworth. (辻正三・中村陽吉訳 対人行動の心理 誠信書房)
- Brim, O. G., Jr. & Hoff, D. B. 1987 Individual and situational differences in desire for certainty. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 54, 225-229.
- Byrne, D. 1969 Attitudes and attraction. In L. Berkowitz. (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (vol. 4). Academic Press. p. 35-89.
- Cohen, A. R., Stotland, E., & Wolfe, D. M. 1955 An experimental inves-

対人関係の親密化に伴う自己開示と類似・異質性認知の変化（下斗米）

- tigation of need for cognition. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **51**, 291-294.
- Derlega, V. J. & Grzelak, J. 1979 Appropriateness of self-disclosure. In G. J. Chelune. & associates. (Eds.). *Self-disclosure*. Jossey-Bass. chap. 6, p. 151-176.
- Heider, F. 1958 *The psychology of interpersonal relations*. New York, Wiley.
- Jourard, S. & Lasakow, P. 1958 Some factors in self-disclosure. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **56**, 91-98.
- Lott, B. E. & Lott, A. J. 1960 The formation of positive attitudes toward group members. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **61**, 297-300.
- Morton, T. L. 1978 Intimacy and reciprocity of change.: A comparison of spouses and strangers. *Journal of Personality and Social Psychology*, **36**, 72-81.
- Newcomb, T. M. 1961 *The acquaintance process*. Holt, Rinehaut and Winston.
- 下斗米淳 1986 将来の相互依存関係の予期と“自己開示”との関係について 日本心理学会第50回大会発表論文集 p.682.
- 下斗米淳 1988 社会的フィードバックが受け手の自己概念変容に及ぼす効果——送り手についての受け手の認知が果たす役割——心理学研究, **59** (3), 164-171.
- 下斗米淳 1990 社会的フィードバックへの対処方略の類型化と、その選択の規定因に受け手の感情が及ぼす効果 社会心理学研究, **6** (1), 52-61
- 下斗米淳・佐藤寛之 1988 友人関係における行動期待についてI 日本心理学会第52回大会発表論文集, p. 213.
- 下斗米淳・清水裕・山岡重行 1980 友人関係の進展を規定する行動期待の研究 日本グループ・ダイナミックス学会第37回大会発表論文集, p.69-70.
- Swann, W. B. 1983 Self-verification: Bringing social reality into harmony with the self. In J. Suls & A. G. Greenwald. (Eds). *Psychological perspectives on the self* (vol. 2). Hillsdale, N. J.: Lawrence Erlbaum Associates. Chap. 2, p. 33-66.
- Swann, W. B. & Read, S. J. 1981 Self-verification processes: How we sustain our self-conceptions. *Journal of Experimental Social Psychology*, **41**, 1119-1128.

対人関係の親密化に伴う自己開示と類似・異質性認知の変化（下斗米）

Tuckman, B. 1965 Developmental sequence in small group. *Psychological Bulletin*, **63**, 384-399.

渡辺芳之 1990 個人的パーソナリティ認知構造と対人行動——第1報：認知されたパーソナリティ類似性と対人魅力、自己開示との関係——日本心理学会第54回大会発表論文集, p.196.

Won-Doornink, M. J. 1979 On getting to know you.: The association between the stage of a relationship and reciprocity of self-disclosure. *Journal of Experimental and Social Psychology*, **15**, 229-241.

（心理学科 助手）